

1月25日（木）2年生授業研究を行いました。2年生の子供達が日常でも友達と仲良く助け合っている姿が授業へとつながっていましたね。大瀬戸先生の日々の学級経営の成果が現れていました。最後のスライドは先生からのプレゼントとして子供達へ忘れられない宝物になったと思います。大瀬戸先生、1年目にして素晴らしい授業提案をありがとうございました。とても刺激になりました。

令和6年1月25日（木） 第2学年

【主題名】 助け合う友達 【内容項目】 B9「友情・信頼」
 【教材名】 「森のともだち」 【出典】 東京書籍

【授業者より】

- 助け合っている姿はあるがその良さに気付かせるために、授業だけでなく他の教科とも関連させながら助け合う場面を意図的に仕組んだ。
- 指導案検討のときに課題として出た、「こんきちの反省」より動物たちの助け合う姿に目を向けられるように動物たち目線で考えられるような展開にした。

【協議】

＜資料提示＞

- 挿絵を動くように提示したり、先生のテンポや抑揚のある範読をしたりすることで、教材の内容を子供達がよく理解できていた。
- 子供達のつぶやきが多く、物語にしっかり入り込むことができていた。その反面、物語からの脱却が難しいとも感じた。物語の世界に入りすぎて「もう、仲間に入れたくない。」という気持ちにいったん理解を示せるとさらに良かったのかもしれない。



＜役割演技＞

- 子供達は動物になりきって役割演技をしていた。ほんたを登場させて切り返したり、「3, 2, 1パン(手)」のスタート合図をしたり、マイクを使って感想を聞いたりする中で、発言の中に子供たちの「友達」への揺るぎない思いを感じることができた。日頃の積み重ねだろうと思った。
- グループでの役割演技が全体となると違うことを話す子もいた。「これだけは話してね」と一言話しておく良かったかもしれない。

＜まとめ＞

- 「自分だったら・・・」「2年生は・・・」と表現できるともっとさらによい。



<終末>

- 最後のスライドは大瀬戸先生の子供達への愛を感じた。「この一年間仲良く生活したな」と気持ちを高めることができたと思う。

【指導助言】(今後のポイントとなること)

○兵庫教育大学 谷田増幸教授

- 最近気になっていることは「範読」である。「範読」は教材の中に入り込んでもらわないといけない大事な場面である。子供によっては文字言語で入ってくる子、アニメーションで入ってくる子と様々であり、それぞれを同時に行うとズレが生じる。今回はモニターに絞って行っていたのが良かった。朗読やテープだと違和感があり、日頃聞き慣れている先生の声で低学年であれば強弱やジェスチャーをつけながら、高学年であればたんとと範読をするのがよい。
- 役割演技は、深める手立ての一つであるが、何を言うか分からない、台詞が決まっているわけではない、先生のマネジメントが必要でとても高度な技術である。単なる動作化ではなく、表情、台詞いろいろ込みでやること、低学年だけではなく、高学年中学生でやるとさらによいと言われている。大事なことは見ている側がどう感じたかということ。フロアの人は何を見ていたのか、どう感じたのか。そこで、何(言葉、表情)に着目させるのかも大事。また、その場に臨場感を与えるために舞台になっていないといけない。中心発問の前にすることが多いかな。
- 森の友達の視点で考えること、「こんきちはなぜ変わった?」という発問により道徳的価値に入っていた。どの言葉が出たら新たな発見、深まりになったのだろう。「友達がいると重い荷物もてる」など道具的な助けあいもあるが、低学年でいうと「友達がいると安心」「一人であるより」など心情的な部分だったのかもしれない。
- 終末の準備がすばらしかった。このスライドのおかげで生活に戻った実感、担任の温かいまなざしが表れていた。
- ずっと同じ調子であるとだれてくるので、緊張(全体)と弛緩(ペア、グループで)を上手く使うと良い。

深める役割演技にするには、見ている人を育てていくことが大切。
役割演技は高度な技術で言うは易しですが、レッツ、チャレンジ!



【山田校長先生】

- 大瀬戸先生の仕組みだ助けあいのシャワーの効果が授業の中でたくさん見られた。また、指導案検討、模擬授業を通して、みんなで作り上げた授業研究となりました。

